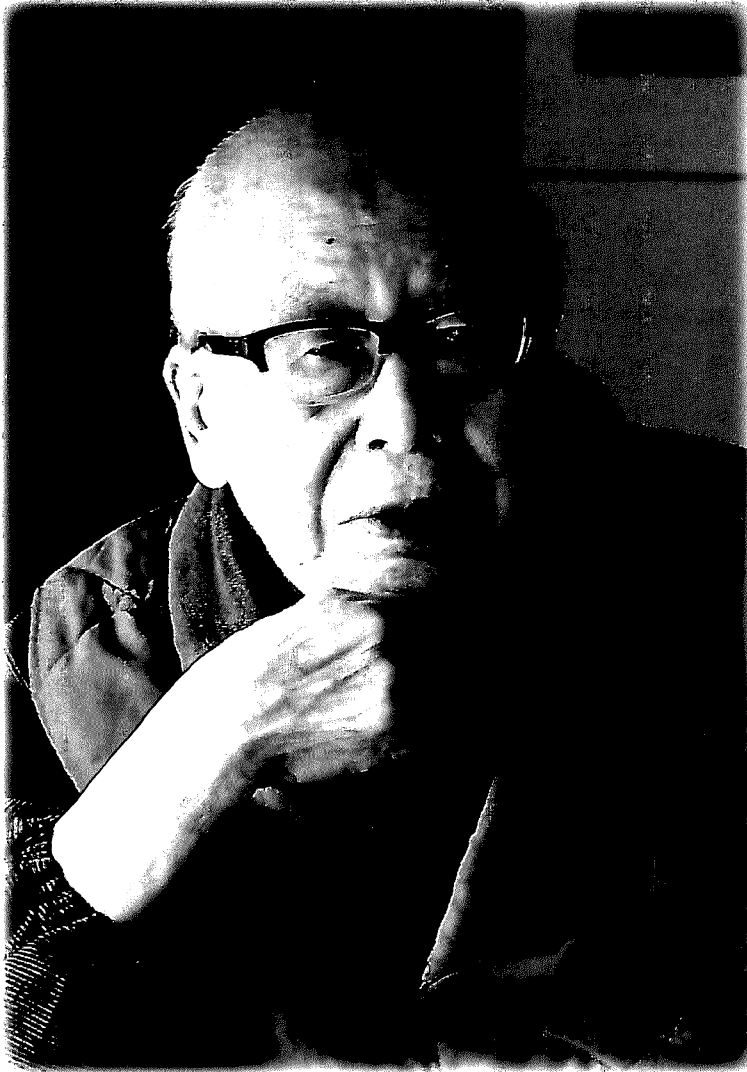


さいたまここに人あり



いきいきとした

生々な人間の魅力を俳句に

俳人 金子兜太さん

秩父で生まれ、トラック島（ミクロネシア連邦国チューク諸島）で敗戦を迎えた俳人の金子兜太さん。身をもって経験した戦争の残虐性から、95歳のいまま精力的に講演し、平和の大切さを訴えている金子さんに、思いをお聞きました。（文責：編集部）

今、一番の心配は徴兵制

—今年が戦後70年の年ですが、金子さんはどのようにお考えですか。

私は70年ということに、特段思い入れはないんですが、とくに原発問題、事故の処理について、素人が見ても不満が残りますね。多くの人が流浪の民になるという…。みんな郷里から離れなければならなくなっている。そういう状況を非常に気にしています。

今年になりましたらね、そのことはずっと底辺にあるんですけど、それに加えて、やはり、政府が自衛隊をどう使うのか、はつきりしなくなってきました。九条がしっかりしていればそういう心配はなかったんですが、どうも九条をいじくりだしている。

そうなる、一番具体的な影響を受けるのが、自衛隊ですよ。自衛隊が今の数では足りなくなるのではないかと。死者も出てくるでしょう。徴兵制にいつごろ移行するか、それとも今の自衛隊で間に合わせるのか…。どちらにしても巨額の防衛費が必要になってくるでしょう。

若い連中が昔のような兵役のなかで苦労するし、死亡がはつきり分らない状況におかれるんじゃないか。それが今、70年を迎えるにあたって一番の心配ごとですね。

—安倍政権は閣議決定のあと、自衛隊派兵の恒久法をつくろうとか後方支援の中身についても言及したり、憲法を変える前に既成事実をつくってしまっているように思います。

おっしゃる通り、実績をどんどんつく

生な人間の魅力と戦争の残虐さ

—いま、金子さんがとくに訴えたいことは何ですか。

戦争というもの、想像以上に残虐なものだということを言いたいです。みなさんが考えているような、絵空事なんかじゃない、残虐なものだということを

つていこうとしているようですね。アメリカとの共同行動というのを、警戒しなければいけないですね。

イスラム国についても、今後アメリカとともに自衛隊が派遣されると、イスラム国からの圧迫も強くなっていくでしょう。それは、アメリカと生き死にを一緒にするという事に追い込まれていくわけです。これは、理屈を言っただけで済ませるでしょうけど、事実がごまかせなくなると思いますね。

イスラム国への対応で、アメリカが日本にどういう要求を突きつけてくるのか、それに注目しなければいかんと思います。

訴えたい。

私のいたトラック島の海軍施設部というのは、工員さんたちの世界でした。工員さんたちは徴用ばかりではなくて募集してきた人たちです。彼らは裸一貫で生きてきた人たちで、「トラック島に行き



撮影：今井卓

たい」と応募して来た人たちです。そこで国のために働くなんて考えてなくて、南洋の島で儲けのひと株に乗りた、そういう非常に無邪気にトラック島に来ているんです。その彼らにも弾が飛んできて、だんだんまわりが死んでいく。あるいは本人が死んでいくわけです。「国のため」なんて考えていない裸の無邪気な連中が、なんとなく国の犠牲になって残酷に死んでいく。その無惨さというのかな、それを感じました。

戦争が終わって日本銀行に戻ったんですけど、戦後のインフレのなかで、本当に沈鬱な顔をして働いているんです。それを見たときに、これはあかん。

トラック島で出会った彼らは残酷な死の方を歩いていったんだけど、明るい。明るいものがつぶされていく、その惨めさを痛感しているから、私はこんな死に方があってはならないと思ってきました。

でも今、目の前にいるのは、憂鬱で可能性が考えられないような人間の集まりに見えました。トラック島の彼らは人間としての可能性が見えたんですね。身分制に縛られている銀行の連中には、希望がないんですよ。

私はまだ若かったですから、封建制が日本にまだ残っている、その社会が変わっていったらどうなるだろうと考えていました。その社会の動きのなかで、自分

も動いていこうという思いにとらわれたわけです。

私が戦地で体験した、いい意味でも悪い意味でも、いきいきとした生なまな人間の魅力、その彼らが無邪気に殺ころされていくということの残酷さ。その姿が忘れられなくて、戦争の非道さを身にしみて感じてきました。そして日本に帰ってくる、そういう「生」な人間の姿というのはないわけです。それが私には不幸に感じられました。

戦争で感じた人間の魅力と、殺されてゆく残酷さ、そのどちらもない戦後の日本で、私はどう生きるか、ずいぶん模索しました。そのはけ口を、俳句に求めたように思います。

いつもトラック島時代の人間の姿が出てきて、人間とはもっと違うものだ、なにかで歪んでいるな、そう思いながらわからずにいました。私はいきいきとした人間の俳句をつくりたい、人間というものはいきいきとさせていない社会の条件を崩していきたい、それを俳句で詠みこんでいきたい、と。高浜虚子のいう「花鳥諷詠」なんていうことではすまん。もつと社会とか人間をえがく俳句にしていきたいと考えてきたわけです。

身体に染みついた七五調

―俳句との出会いはいつでしたか。

私が小学生のとき、医者で俳人だった父親が、埼玉県から明治神宮遷座祭に奉納する民謡をまかされました。それが「秩父豊年踊り」といって、いまの「秩父音頭」です。そのために毎晩、庭で唄と踊りをやっていたんです。それをずっと聞いていました。だから、子どもの頃から七五調が身体に染みこんでいるんです。

これが、私を決定的に俳句人間にしました。これがなければ、私はつまらない人間になっていたでしょうね。

それから忘れられないのが、親父のところに集まっていた俳句をつくっている中・壮年の連中が議論になってケンカになる、それが子どもにとっておもしろいんです。俳句をつくる人間のおもしろさ。

そして旧制高校に入り、1年先輩で非常に魅力的な男に出会って俳句に引き込まれるんです。その男も自由で人間臭い男でした。その男が連れて行ってくれた教授も、非常に自由な男でした。

田舎の、野性的だがしかしどこかに知性のある人間、そして学校の先輩や先生の自由人といえる人たちとの出会いによって、人間の魅力というものが生涯私を

平和な気分を句に

―昨年、さいたま市の公民館で、館報への俳句掲載拒否事件が起こりました。

私が若い頃に、京大俳句事件というのがありました。治安維持法で引っかかって、俳人もだぶ捕まったんです。新興俳句運動の連中が「俳句にリアリズムが必要だ」と訴えていたんですが、当局は「俳句で現実をかくなんて社会主義だ」となってしまったんです。

だけど、俳句で社会のことを扱って社会主義だとは、今では考えられないですよ。あの当時は、すぐに「自由主義」「利己主義」、もっとひどいと「社会主義」と批判されましたから。

支配しているんです。七五調と、それに関わる人間との出会いのなから、人間の「生」のもの、自由な部分が染みついている、これは私にとって財産になっています。そしてそれに憧れるあまり、ずっとそれに引きずられて活動してきました。だから、世間的に見れば私は異端に見えるかもしれません。

デモをうたっただけで「政権に反対だ」なんて単純な受け取り方に、また治安維持法の時代に戻ったかなと思いたね。これは、為政者側の問題だけではなくて、社会の側の意識の遅れということもありますね。

―今、東京新聞で「平和の俳句」のコーナーを担当していらっしゃいますね。

東京新聞の対談で、作家のいとうせいこう君と対談して、彼が言い出したんですよ。私は非常に気軽に考えて、今のよくなきな臭い時代、そういうなかで生活の明るい面、楽観できる面を俳句で捉え

る。そういうことをやれば、少しは雰囲気が動くんじゃないかと。とにかく俳句は短い言葉でつくりやすいですから、気分をなごやかにする、そういう効果を期待して俳句を活用することはできないだろうか。そんなふうな気持ちがあつて、せいこう君の提案に賛成したんです。

若い世代へ伝えたいこと

—いま、政治家を含めて戦争を経験していない世代は、戦争に対する想像力が欠如しているように思います。若い世代へのメッセージをお願いします。

私の原点は、戦争とはひどいもんだ、いい人間たちがどんどん殺されていくんだという思いで、戦争に反対しているんです。いい人間が平気で殺されていくのが戦争。それを肯定できませんか。戦争になればあんたがたも死ぬかもしれないよ、その覚悟はあるのか、ということ。

戦争は、どうやっても救いようのない悪だと思っんです。人が死んで死につ放しですよ。そんな無茶なことはありませんか。

彼はもつと積極的な思いを持っていたようですが、私は「こういうときに平和な気分を感じる」と、体験的に気軽に書いてほしいと思っっています。気分を喚起することによって、しだいにそれが熱くなつていくと思っにまでつながつていく。それが貴重だと思っんです。

—教職員へ伝えたいことはありますか。

私は、昔から教育者というのを非常に尊敬しているんですよ。「教育者は給料が安くていいんだ」なんていう精神論者には反発を持っっていましたね。

覚えているのは、小学校4、5年生のときの担任に島田光治先生という方がいるんです。彼を見て、どうも教員は大変らしいと思っっていました。どうやら給料が安いと。それで、たまに島田先生にお菓子をあげたりしてね。その先生が、生徒を自分のことのように心配するんですよ。それが分かるんだなあ。いまだに尊敬する先生は、島田先生なんです。それにしても、昔に比べて、いまの先

生は利口な人が多いですね。知恵があるというか。ああいう世間の知恵が気に入らないなあ。この前の川崎市の河原での殺人事件だつて、1カ月前からわかつていたというでしょう。それなのに、どうして学校は手を打たなかつたのか。忙しいというのもあるでしょうが、そういうなかで知恵を使っているんじゃないでしょうか。人間の問題なんです。島田先生は自ずから「人間」に触れていました。ですから、大きな企業の剰余金を増やすなんてケチな考えじゃなくて、もつともつと教育費を増やさなければいけないと思っていますね。「人間」を大事にする金をね。



撮影：今井卓

かねこうたさんプロフィール
1919年、秩父生まれ。旧制熊谷中学出身。東京帝国大学卒業後、日本銀行に就職。海軍主計大尉としてトラック島で敗戦を迎える。戦後、日本銀行に務め1974年退職。元朝日俳壇選者。現代俳句協会名誉会長。